

みんなの語り 3 民放史

題字 中川 順

今は「花の女子アナ」が話題の中心として週刊誌や写真週刊誌などで紹介されますが、平成13年秋から14年春にかけて「スポーツニッポン」近畿版の日曜日に連載された、『テレビの国のOG・OB』という企画記事は、近畿各局のシニアの現役時代の活躍ぶりがかがえるものでした。関西民放クラブの会報に紹介された中から7編を転載しました。

写真提供 MBS、YTV。(各文末の年月日は掲載日)

私はこうして

ケネディ暗殺を伝えました

前田 治郎 (MBS)

私は昭和38年(1961)2月からニューヨークに毎日放送の特派員として滞在していた。同年11



ケネディの悲報を伝える前田特派員

月22日、米国から日本に通信衛星を使ってテレビ映像を送る実験が政府間の取り決めによって行われた。広大な太平洋を越えてテレビの電波が果たして日本に届くのか。通信技術の歴史上画期的な日であった。

ところが当日、世界中を驚愕させた大事件が発生した。ケネディ大統領がテキサス州ダラス市内で凶弾に撃たれて死亡してしまったのである。出先でその事件を知った私は、当時業務を提携していたアメリカABC放送の国際部門のオフィスに駆けつけた。日本にリポートする材料を集めるためであ

る。そのうちにスタッフの1人、ジェイコブ氏が私に言った。

「今日は通信衛星の実験の日、1回目は成功したがもう1回実験が可能だ。それは午後7時から15分間だ。君がここにいるのだから、この電波に乗せて日本語でこの大事件のニュースを日本に送ったらどうか？」思いがけないことで、自信はなかったが考えている場合ではない。「わかった。やります」と答えた。

それから大変、刻々と時間が迫る。15分間もリポートできる材料はそろっていない。原稿を作るばかりだ。しかし、私を支えてくれたのは、アナウンサーとしての経験であった。始めれば何とかやるだろうと開き直った。「落ちついて」と言い聞かせながらスタート。

事件発生の様相、容疑者が逮捕されたこと、テレビの歴史上記念すべき日にこのようなニュースを送ることはまさに残念であることなど、目の前のテレビを見ながらまたそばに座ったABCのスタッフに渡してくれるメモを見ながら何とか15分を乗り切った。

初めての衛星中継ということで

おそらく日本の全テレビ局が待ち構えていたところに、このショッキングなニュースが飛び込んできたのだが、偶然にもそのリポートを担当した私にとつては終生忘れることのない強烈な思い出である。

(平成13・11・4)

エノケンとの競演は幻に

故松下 焯(ABC)

大阪の民間放送が始まって50年になる。私は昭和26年のABCラジオの開局から約25年、ラジオとテレビの番組プロデューサーとして主にドラマを担当した。

長い年月にはいろいろなことがあり、多種多様なタレントと付き合った。

今をときめく扇千景参議院議長とも、その昔ラジオドラマで一瞬のご縁があった。

昭和31年だったと思う。正月企画として「百万円」をテーマにしたラジオドラマを作ることになった。ちょうどその時、梅田コマ劇場に「日本の喜劇王」エノケンさんが出演しておられた。私はエノケンさんを主役にラジオミュージカルを考えた。当時のエノケンさんといえは、まさに飛ぶ鳥を落と

す勢いだった。私はコマ劇場に先生を訪ね、礼を尽くしてご出演を乞うたのでOKとなった。

脚本は宝塚の舞台演出家の、今は亡きT氏に頼んだ。出来たシナリオはエノケンさんがひそかに一人の美少女を思い、はかなくその恋が消えていく…というチャップリンばりのストーリーだった。

「この少女、誰がいい?」とたずねると、T氏は「うち(宝塚)の若手女優でいいのがある。ぜひ起用したい」と熱心に勧めた。

その若手女優が扇千景さんだったのである。

稽古は、エノケンさんの宿泊先の梅田の旅館の一室で、夜、コマの舞台が終わってから始まった。T氏に連れられて扇さんがやって来た。美人とは聞いていたが、噂に違いはなかった。それと、本当に「借りてきた猫」のようにおとなしく、恐縮いっぱいで消え入るような声で「扇千景でございます。よろしくお願ひ致します」と頭を下げたのが印象的だった。しかし、この「エノケン・扇千景主演」という企画は日の目を見なかった。

翌日、宝塚の学校事務局から「扇はまだ研究生なので、他社への

出演は許可しません」というきついクレームが出て、結局、この役は別の女優さんになってしまった。

40数年前の扇参議院議長のエピソードである。扇さんは覚えているだろうか…。

あのおどおどして部屋に入ってきた、初々しい彼女のことは今も鮮明に記憶に残る。

歳月は大きく人を変える、といったら失礼だろうか…。

(平成13・11・18)

“難産”から生まれる高視聴率

内海 佑治(KTV)

視聴率にはよく泣かされた。低かったために放送中止となり、ディレクターからアシスタントに降格。また高かったために背中に板を入れてそっくり返って歩いているといわれて干されたこともある。

私の経験では高視聴率の番組は難産が多かった。ゴールデンタイムで常時20%以上、時には30%を超えた『どてらい男』は、はじめ予定していた番組がフジの企画に似ているとかで制作直前につぶれ、慌てて新しくつくりかえたのに、今度はスポンサーの逆鱗にふれて半年以上もオクラ入り。がフ

夕をあけてみると3年6カ月18
1回の超ロングランとなった。

森繁久弥、吉永小百合の『吉田
茂』は娘の目を通して戦後昭和史
を描いたものであったが、大臣を
65人もつくった超ワンマンの愛娘
は麻生和子さん(麻生太郎の母)。

この人に気に入られようと田中
角栄はじめ代議士がむらがつたと
いうだけあって、田中真紀子も比
ではない威厳があった。

ある日突然彼女から電話があつ
た。吉田の『愛人』小りんを脚本
からはずせという。小りんの存在
は公然の秘密であり、しかも山田
五十鈴の予定。今さらなぜかとム
ツとすると「昭和天皇がご覧にな
ることになったからとにかく消
せ」。彼女には随分振り回された
が、この3時間ドラマ、29・2%もあ
つた。

『船場』43・9%、大阪国際マラソ
ン45・3%にも何かと問題は起こつ
たが、綱渡りの連続は85年阪神タ
イガース優勝決定戦をおいてない。

9月11日59勝40敗でM22が点
灯した時、70勝が山場とみて、フ
ジ、KTVの放送権を調べると、
神宮での10月16日からの対ヤクル
トナイター3連戦がこれにあつた

た。直ちに深夜放送でもと編成部
に申し入れるが一蹴。

9月30日にはM8となり、よ
うやく編成も本気になってフジに
全国放送を打診するが拒否され
る。膠着状態がつづいた。10月9
日M6。ついに巻幡編成局長が関
西地区だけでもやると決断。これ
に押されてフジも胴上げだけは放
送することに。

いよいよ10月16日M1。がこの
日のデーゲーム巨人―広島戦で、
広島が負けると自動的に阪神優勝
で放送の意味はなくなる。しかし
広島が勝ち、怖いような熱気のも
と試合は始まった。放送は関西だ
けのはずだったが、抗議の嵐は各
地に沸きあがり、結局全国にネッ
トされた。

56・7%という公式戦中継最高
視聴率(瞬間最大74・6%)となつ
たのである。(平成13・11・25)

エネルギーシユだった

新喜劇演者たち

山口 洋司(YTV)

『親バカ子バカ』『とんま天狗』
など大阪発のスタジオ・コメディ
が全国に旋風を巻き起こそうとし
ていた一番活気のある昭和35年4



『親バカ子バカ』の一場面 渋谷天外、藤山寛美

月に入社した。

念願の制作部に入ることがで
き、アシスタントとして最初の仕
事は大阪・天下茶屋にあった渋谷
天外宅へ『親バカ子バカ』の原稿
をとりに行くことであつた。

何しろ天外さんはその日の夜収
録する原稿を朝書いているのであ
る。7、8枚ずつできたのを何度
か往復して持ち帰り、その生原稿
にディレクターがカメラ割をして、
待機している印刷屋さんに渡す。
台本が出来上がるのが夜も遅くな
つてからで、ちょうどその頃中座
の夜の芝居を終えた出演者たちが
スタジオに入ってくる。

2度の簡単なリハーサルの中でみなせりふを覚え、最後のカメラリハーサルでは本番と同じように台本を放して進める。まさに離れ業に思えたが新喜劇の人達は当然のこのように2本撮りを終えて夜も白む頃、また楽屋に帰って行くのであった。

そんな中で番組の人気は上がり、藤山寛美というスターが生まれたわけだが、その寛美だけはリハーサルのときから違っていた。

スタジオのモニターを自分の見える位置に移動することを求め、今自分がどんなカメラサイズで映っているのかをセリフを覚えることとそつちのけでまず頭に入れる。

「あのね、もしもし、僕ね！」あの独特の言い回しをしながら、アップの時、2ショットのときは、などとカメラのサイズに合わせて自在に芝居を組み立てて、それは舞台とまるで違った新しいメディアであるテレビの特性を面白がって取り込んでいるようであった。寛美の人気に乗じて読売テレビでは寛美主演の『しゃっくり寛太』をさらに制作。これは寛太が横山エンタツや南都雄二、エノケン、森光子らと丁々発止で掛け合いを

する読み切り時代劇。当時は舞台に出ていた演者の都合で徹夜に近い収録は当たり前であったが、これも終了は夜中の3時頃。終わると、ここが寛美らしいところであるが、きれいだころに酒肴(しゅこう)をいっぱい運ばせてあり、スタジオ前のロビーはきまって大宴会、掃除のおばさんがやってくる頃やつとお開きになるのである。寛美ら演者のバイタリティー、エネルギーにあおられながらディレクターになることだけを気持ちの支えにしていた日々のであ

(平成13・12・3)

ゴンドラが上がりず収録中止に

金子 俊彦(MBS)

毎日放送は、平成13年、創立50周年を迎えた。半世紀に及ぶこの間、視聴者の皆さんから高いご支持を頂いた番組は数多いが『アツプダウンクイズ』もその一つであった。

昭和38年10月から同60年10月まで22年間、放送回数1084回を重ねたこの番組はその間の関西での平均視聴率が21・6%という人気番組だった。

私はこの半分近い期間をディレ

クターとして担当する幸運に恵まれた。

長寿番組だっただけに、この間の番組にまつわるエピソードには事欠かないが、そのホンの一端をご紹介したい。

大関に昇進した直後の輪島関(後の54代横綱)に回答者として出場してもらった時のことである。どんな問題だったか忘れたが、答えが「江戸」の問題に輪島関が真っ先にボタンを押した。すかさず司会の小池アナウンサーが「輪島さん、どうぞ!」とうながすと、輪島関は「えーと、えーと」と口ごもった。おそらく早とちりで回答ボタンを押してしまったものだろう。ところが小池アナのほうで「えーと」を「江戸」と聞き間違えて「江戸!はい正解!」と叫んでしまった。そしてゴンドラはなにごともなかったように一段上上がったのである。

大相撲の高嶋親方(現役時のしこ名は三根山・平成元年没)に出演してもらった時は笑ってすませる話ではなかった。180^キの重さまでは大丈夫なはずのゴンドラがどういうわけか、親方の乗ったゴンドラだけが本番前のリハーサル



『アップダウンクイズ』このゴンドラが上がらなかった!

の際どうしても上がらなかったの
である。もちろん出演依頼のとき
に体重も聞いて大丈夫という判断
で出演していただいたのだが何度
テストしてもだめだった。仕方な
くほかの出演者の皆さんに平謝り
に謝って結局本番の収録をあきら
めざるを得なかった。そしてこれ
を機にゴンドラを200kgの重さま
で耐えられるように改造し、以来
ゴンドラの2人乗りが可能になっ
た。

ここにあるはずである。2代目の
ゴンドラは先ごろ150万円かけ
て補修され、平成13年9月に放送
されたMBS50周年記念番組に使
われた。
(平成13・12・16)

土曜の正午に23年君臨
『ノックは無用!』
築 典雄 (KTV)

「ノックは無用!」は関西テレ
ビを代表するバラエティ番組であ
った。1997年9月27日、11
54回を以って終了したが、23年
間に及ぶ長寿番組でもあった。こ
の間、横山ノック、上岡龍太郎の
両司会者は変わることなく、生放
送を務め上げた。参議院議員のノ
ックは、国会会期中や立候補公示
の1カ月間、番組から離れること
はあったが、上岡は一度も休まな
かった。

両司会者が芸能界に確たる地位
を占めだすとともに、番組は安定
し、そのうち土曜の正午は他局に
とって視聴率の取りにくい魔の時
間になっていった。

毎週6人の芸能人や文化人が登
場、1カ月24人、年間300人と
出会うこの番組は担当者の大きな
財産になった。新人ディレクター
は何らかの形でこの番組のスタッ
フになり、その後、他の番組へと
移っていった。

10年が過ぎる頃「偉大なマンネ
リズム」を自負してきた。新しい
担当者は内容や展開を変えようと
しがちになる。一切それをさせず、
ゲストとの出演交渉に全精力を注
ぐ努力をさせた。1154回セッ
トの似顔絵以外、番組当初のまま
貫いた。ゲストが時代を背負って
登場し、「今」を語ってくれること
で、常に新鮮さを保つことがで
きたのであった。

1000回を迎えた時、ノックが
知事になった。地方自治体の長に
は休暇がなかった。ノックの出演
に対し議会が反対し、マスコミは
好意的ではなかった。テレビで「馬
鹿」をやる暇があるなら公務に専
念せよ、新人知事はもっと勉強せ

この番組の企画が出た頃、テレ
ビ界はビジュアル面を追い求めて
いたので、人の顔と話だけではテ
レビになりえないと反対された。
ラジオ感覚のテレビだとか、忙し
い主婦が昼時台所にいながら見聞
きできる気軽な番組であるなどと
説得し、実現した。考えればト
ク番組の「はしり」であった。

一年配の視聴者の皆さんにはなじ
み深い初代ゴンドラは、その後香
港の映画に使われ、今も香港のど

よ…、大方の意見であった。ノックは政治家として二十数年の実績を培ったベテランであり、公務の空いた時間にテレビ出演することに問題はないと司会継続を主張し続けた。もしノックが名医であり、公務の間をさき人命を救ったなら美談として伝えられるのだろう。お笑い芸人であることで非難されるのは職業差別があるのでは、と反論した。

それから1年『ノックは無用!』は終わり、2年後、横山ノック、上岡龍太郎は芸能界から姿を消した。(平成13・12・30)

試行錯誤の末生まれた11PM

清川 武寛 (YTV)

『11PM』は昭和40年11月8日に始まった。深夜の11時からである。しかもすべて生放送である。月金は東京発、火木が大阪発で同一タイトルの番組ということ、大阪色を強烈に出し、しかも面白い番組にしなければ、深夜まで起きている視聴者に捨てられない。まず仕事始めは司会者の選択から大阪色を出すことになる。

ホストはドラマの脚本家であり、作家の藤本義一さんに交渉し

応諾を得た。次はホステス役である。関西色といえは京都の祇園。祇園の芸妓さんの幾人かを候補に上げ交渉に通った。

しかしほとんどの方が「今まで普通の写真も撮ったことがないのに、ましてテレビに出るなどもつてのほか」とすべて断られた。困り果てているとき、安藤孝子さんがドラマ『祇園物語』の方言指導をしていたと聞き、すぐさま安藤さんのところへくどきに走った。はじめは強く躊躇されていたが、当方も必死。座敷に上がりこんでくどいた末、やっと「相談してみます」という返事をもらった。しかしまだ快諾ではない。パイロット版を撮る日までは不安だ。

いよいよ、その日になる。スタジオ周辺はどんな番組になるのか興味津々の顔、不安げな顔などがあふれていた。そんな雰囲気の中でたし。義一ちゃん・安孝コンビの『11PM』が生まれたのである。当初は「大阪発は色気過多だ」「あれではエロブン・PM」だときついお叱りを受けたが、何も裸ばかりをお見せしたのではない。制作者としては、それまでほとん

ど人目にふれなかつた日本の裏文化に極力光を当て、奇祭や秘事、つまりフォークロアをテレビで掘り起こそうとしたのである。

悪評、好評得る中で民放祭の大賞なども受賞した。深夜ワイドショーとしてはたして視聴者に見てもらえるのか、どの方向が正しいのか試行錯誤の繰り返しなかで生まれた『11PM』も、32年後の現在放送されている数々のワイドショーから見れば、少しは番組哲学があつたような気がする。

藤本義一さんは「この番組は3月で終わるでえ」といつていた。



安藤孝子、藤本義一 11PMスタジオ風景

ホステスは何代か代わりはしたが、ホストの藤本義一さんは昭和から平成に年号が変わって平成2年3月29日に番組が終了するまで25年間、一日も休まず『11PM』の司会を務められた。25年。

(平成14・1・6)